

「二上山に偲ぶ」 — 鳥谷口古墳 —

1 はじめに

当麻寺から北西に1kmほど進むと、二上山の裾にたどり着く。その小高い所に、灌漑用の「大池」はある。昭和58年5月、この大池の堤改修工事に使用する土取り作業が、二上山尾根の下に延びる先端部分を削って開始された。掘削は計画地の南斜面西端から東端に向かって進められていった。しかし、東に向かうにしたがって、パワーシャベルに石が当たり、やがて大きな積み石が斜面を転がり落ちるようになった。「古墳でないか」。運転手は、あわてて奈良県庁に電話を入れた。これが「鳥谷口古墳」の発見の経緯である。

2 鳥谷口古墳

「古墳発見」の一報とともに、直ちに橿原考古学研究所による調査が開始された。

①第一次調査 昭和58年(1983)5月14日 ～ 6月24日

②第二次調査 昭和60年(1985)5月20日 ～ 7月17日

平成6年(1994)3月には、『鳥谷口古墳調査報告書^{註[-]}』が発行され、その詳細が判明した。

(1) 古墳の立地

古墳は、葛城市^{しめ}染野字鳥谷口679に所在する。二上山雄岳から山麓に向かって幾筋もの尾根が下り、平地に裾を延ばしている。鳥谷口古墳は、このうち東南の方向に延びて大池に向かう尾根支脈の先端に位置する。北に二上山を背にする古墳は、西南に別の尾根が眼前を遮り、視界は東南の方向に開けている。このことが幸いし、古墳から耳成山、畝傍山、香具山の大和三山や三輪山などを望むことができる。また、逆に視点をおけば、飛鳥地域から古墳の所在地域・方向を遠望できるともいえる。このことは、古墳の立地を決定する際に、考慮する要因の一つとなったのではないだろうか。

(2) 古墳の構造・規模

鳥谷口古墳は、西から東に向かって下り延びる尾根の先端部分に造られた。一辺が7・6m、高さ2・1mの方墳である。この墳丘の西、北、東の各辺を「コの字」の溝(掘割り)が囲んでいた。また、人頭大の自然石の貼石が、墳丘上部の東西南北を四周して積まれていた。埋葬施設堀方の東側では、一辺89cm、深さ110cmの柱穴状遺構が検出された。

石槨石材などを引き上げるために使われた轆轤跡と思われる。今、現地を訪れば、岩屋峠に向かう登山道右側の小高い丘上に、古墳は姿を現している。しかしながら、発見される前は、尾根から流失した土砂が古墳上に堆積し、雑木が茂る景観となり、土砂に埋もれて永い眠りについていた。誰も、そこに古墳があると気づいていなかったのである。

(3) 埋葬施設

墳丘に覆われて石槨、前室からなる埋葬施設があった。

① 横口式石槨

埋葬施設は、東西に長軸をとり、南側石に開口部を有する横口式石槨である。石槨は組み合わせ式の構造で、底石一石、北側石二石、東側石一石、西側石一石、南側石一石、南柱状石一石、天井石一石からなっている。

石槨の内法は、次の通り比較的小さめである。

東端幅 66 cm 西端幅 60 cm

長さ(東西) 158 cm この南側に開口部あり

高さ 71 cm

② 南側開口部

開口部分となる南側は、南側石一石が、西から南側の三分の二以上を占め、残る部分が開口部となる。従って、開口部は次にみるように狭い。なお、開口部は三段の閉塞石により、閉じられていた。この三段の閉塞石は、土取り工事の際に、斜面を他の石材とともに崩落し、上段・下段は発見されたが、中段は発見されていない。

石槨の開口部の大きさ

幅 40 cm 高さ 50 cm

③ 前室

開口部外側には、前室が設けられていた。古墳からは遺物として土師器、須恵器の土器類も発掘されているが、これら土器類は、前室に置かれていたと推測されている。前室は、土取り作業により、全壊に近い状態であったが、天井石は残り発見されたことから、その規模は次の通りと推測されている。

前室の規模

幅 135 cm 奥行き 100 cm

④ 石槨に使われている石材の特筆すべきこと

鳥谷口古墳の石槨は、組み合わせ式の構造で、すべて凝灰岩の石材を使っている。この石槨石材で、特筆すべきことは、多くに家形石棺の蓋^{ふた}の未製品が使われていることである。家形石棺は、身の部分は削り抜いたものや、組み合わせのもので、蓋は寄棟造りの屋根の形をなす例が多い。そこに大型の「縄掛突起」も存^{註〔二〕}する。ここにいう

蓋部分が、次にみるように石槨の石材として使われているのである。

○組み合わせ式家形石棺蓋 「未製品」 方形突起物(扁平な縄掛突起)持つ

北側石 計二石

○剥り抜き式家形石棺蓋 「未製品」 方形突起物(扁平な縄掛突起)持つ

天井石 一石

○剥り抜き式家形石棺蓋 「未製品」 無突起 内面、側面ともに平滑

底石 一石

○板状に加工した石材

東側石 一石 西側石 一石 南側石 一石

○柱状に加工した石材

南柱状石 一石

ここにみるように、各種の石材が使われ、工程上からみても最終調整段階と未調整段階のものが混在している。石切り作業場で工人集団が製作し、そのとき手元に保管している「既製の未製品」を、急場しのぎの求めに応じて提供し、対応したと思われるのである。

⑤石材の採石地

二上山の岩屋越えの峠の頂上に岩屋がある。これを別名二上山廃寺ともいうが、凝灰岩の岩を剥り抜いた石窟として残る石切り場跡である。また、岩屋からさらに西に下ったところに鹿谷寺跡ろくたにじがある。地山の凝灰岩を切りとって造られたものであり、凝灰岩をそのまま残した十三重の石塔、山壁を掘り穿って造った石窟もある。二つの寺跡は、飛鳥時代の石切り場跡であり、ここは凝灰岩の採掘場跡であった。鳥谷口古墳の石槨として使われている石材は、近場の、この岩屋峠周辺の石切り作業場から運ばれたものと思われる。

また、墳丘上部に貼られていた人頭大の自然石は、当古墳の南や北にある谷川から採石していると推定されている。

(4)発掘に伴う出土物について

古墳からの出土物についてみると、土取り跡の掘削土から、土器が出土した。

①土師器 杯・甕・脚付盤 須恵器 杯蓋・杯身・高坏

前室に置かれ、古墳に供献された土器類と思われ、橿原考古学研究所の編年判定では、七世紀後半の飛鳥・藤原宮時代の土器と判定註〔三〕している。このことは、古墳の造営時期を探る重要な要素となっている。

②中世の土師器皿・瓦器椀

また、中世の土師器皿、瓦器椀も出土した。このことは中世にも、これらが古墳に供献され、祭祀的なことが行われていたことが考えられる。少なくとも中世までは、

この古墳の存在が意識されていたことになる。

③石槨内の遺物について

一方、石槨内の堆積土からは、骨、歯、金属製品などの遺物は出土しなかった。石槨内が小動物の棲家になっていた形跡が残るが、盗掘等もなかったと考えられるなかで、石槨内に、「何の遺物も残っていない」ことが、今後の課題として残されている。

3 鳥谷口古墳・埋葬石槨の特徴

鳥谷口古墳の埋葬石槨の特徴を探るため、ほぼ同時代の皇族陵墓と考えられている古墳の石槨容量(大きさ)の比較を行ってみよう。(被葬者は定説、単位m いずれも内法)

この比較により、鳥谷口古墳の特徴が浮かび上がる。

「古墳の名称」	「被葬者」	「葬法」	「埋葬施設」	「長さ」	「幅」	「高さ」
①鳥谷口古墳			横口式石槨	1・58	0・60	0・71
②東明神古墳	(草壁皇子)	直葬	横口式石槨	3・09	2・06	1・27
③中尾山古墳	(文武天皇)	火葬	横口式石槨	0・90	0・90	0・87

ここにみるように鳥谷口古墳の埋葬施設は、直葬墳である②に比べ内法規模が小さく、③の火葬墳に近い。成人を直葬するには無理がある。ましてや開口部は、幅40cm、高さ50cmの手狭の状況にあり、この開口部から成人の伸展葬及び屈葬の遺骸を石槨内に納めることは不可能である。このことから、鳥谷口古墳の石槨内に納めることが可能な遺骸は、火葬骨または改葬骨と推定されている。

4 鳥谷口古墳の被葬者

以上の論述を踏まえると、鳥谷口古墳は大津皇子の墓である可能性が高い。再度、その主張の背景となっていることを整理すると、次のとおりである。

①鳥谷口古墳は「二上山に在る」。

大津皇子の移葬に関わる『萬葉集』の題詞は、「二上山に移し葬る」と記しているが、この古墳は、その二上山に在る。また、現状二上山の山域に位置する古墳は、この鳥谷口古墳以外には発見されていない。

②あわただしく、急場しのぎの対応が行われた。

埋葬施設である石槨に、家形石棺蓋の未製品が使われ、あわただしく急場しのぎの対応で、古墳の造営が行われたことを推定させる。

このことは、10月に大津皇子が刑死し、一旦埋葬された皇子の遺骸を、翌年春、姉大

伯皇女の嘆願で持統天皇が了承し、移し、埋葬しなおすというあわただしさと、状況的に一致する。また、既製の、加工途上の石棺蓋を使うなどという、通常見られぬ対応が行われていることは、罪びとに対する一貫した冷徹さが感じられる。

③ 移葬骨が納められた。

遺骸を納める石槨の容量、ならびに狭い南側開口部の状況から、物理的に埋葬施設である石槨に納められるのは、改葬骨または火葬骨である。

改葬骨は、遺体を仮埋めし、後に骨だけを小さな棺に納めて、改めて埋葬するものである。刑死、埋葬後の大津皇子の移葬骨も、これに準じた対応が行われたものと思われ、鳥谷口古墳の石槨の状況に適合するのである。

④ 古墳の築造年代が七世紀後半である。

出土土器の編年判定から、古墳の築造年代は、七世紀後半と判定される。このことは、大津皇子の移葬時期に合致する。

⑤ 立地が風水思想に合致する。

今、鳥谷口古墳を訪ねれば、谷奥に突出する小高い尾根の一支脈の上に、陽だまりの中で、大池を見下ろしながら静かに佇んでいる。うしろに山を負い、前に川も流れ、この古墳の立地は往時の風水思想に合致する。

それでは次に、「誰が、この地を大津皇子の移葬先としたのか」、この課題に取り組みたい。

5 当麻氏

大津皇子の二上山への移葬に当麻氏が関わっていると推定している。しばらく当麻氏の姿を追ってみたい。

(1) 真人の姓

当麻氏は、葛城の大氏族である葛城氏とも深い関係を持ちながら、当麻から二上山東西に及ぶ地域に勢力を張る豪族であったと思われる。この当麻氏が氏族として、飛躍するきっかけとなったのは、天皇家と血縁関係を持ったことである。『日本書紀』(以下『紀』)は用明天皇の娶る嬪の一人として、次のように記す。

「葛城直磐村が女廣子、一の男・一の女を生めり。男をば麻呂子皇子と曰す。此れ當麻公の先なり」(『古事記』では、親及び女名が、当麻倉首比呂之女、飯之子とある)

このことから、当麻氏は天皇家とも緊密になり、姓として「公」を名乗り、のち天武13年(684)の「八色の姓の制」により「真人」の姓を賜るのである。

(2) 万法蔵院禅林寺

当麻寺は当麻氏の氏寺であるが、『当麻寺縁起』によれば、当寺の源流は、麻呂子

皇子が、二上山の西に建立した万法藏院禅林寺という寺であったと伝えている。のちに二上山の東南の麓にあたる現在地に移されたとする。このことは、当麻氏が二上山の東側のみでなく、峠を越えた西側にも勢力を伸ばしていたことを示す意味で、重要なことである。二上山岩屋峠周辺の主要な石切り場は、峠^{いただき}頂の「岩屋」と、峠を西に下った「鹿谷寺跡」である。当麻氏は、広い意味で東側当麻に含まれる「岩屋」はもちろん、西側の「鹿谷寺跡」も、支配領域に納めていたと推定することも可能である。言い換えれば、当麻氏は、当時の有力な石切り場である「岩屋」と「鹿谷寺跡」の二か所を、ともに自領内に抱えていたともいえるのである。

(3) 当麻真人国見

当麻氏は、壬申の乱に際して、徹底して大海人皇子(天武天皇)側に立つ。これにより壬申の乱の功臣を輩出し、天武朝で朝廷を支える有力な氏族となった。天武朝さらには持統朝・文武朝と、永きにわたり氏族の長として、事に当たったのは当麻真人国見であった。『当麻寺縁起』も、当麻寺を天武13年(684)に、現在地に移し創建したのは当麻国見と伝えている。国見の事跡をみて見ると以下のとおりである。

① 天武天皇親衛軍の長であったこと

当麻国見は、天武天皇の葬儀・殯において、天皇家の家政の立場から誄を行っている。

『紀』は記す。「次に直大参当麻真人国見、左右の^{とねり}兵衛の事を^{しのびごとたてまつる}誄る」。左右の兵衛は、天武朝に整備された左右兵衛府に各四百人が所属する天皇の親衛軍である。国見は、この親衛軍の統率を行っていたこととなり、天武天皇からも、いわば身内の立場で全幅の信頼を置かれていたことになる。真人として皇室につながり、軍事的能力、政治的能力をともに備える人物であったと思われる。

② 軽皇子(文武天皇)の東宮太傅に任じられたこと

国見は、天武朝を継承する持統朝においても重用される。むしろ本論においては、このことが重要であり、天武亡きあと、持統天皇は国見を、朝政を支える重鎮として処遇している。『紀』は記す。「持統11年(697)2月28日、直大^{みこのみやおほかしづき}参当麻真人国見を以て、東宮太傅とす」。持統天皇は、国見の力と識見に頼り、軽皇子(文武天皇)の訓育に任じたのである。

③ 越智山陵(齐明天皇陵)の修復を行ったこと

『続日本紀』によれば、文武3年(699)10月、越智山陵、山科山陵の修造が命ぜられ、工事担当者が発令されている。この時、直大^{みこのみやおほかしづき}参当麻真人国見は、越智山陵(齐明天皇陵)修造の実質責任者として任命されている。山科山陵(天智天皇陵)は、直大^{みこのみやおほかしづき}参栗田朝臣真人である。ともに、陵の修造・施工に力量を発揮できる人物として任命されたものと思われる。

ここにみるように、当麻真人国見は、天武朝は勿論、続く持統朝・文武朝においても頼りにされ、重用された人物である。

(4) 当麻真人智徳

ここで、当麻真人智徳にも言及しておかねばならない。智徳も国見と同時代の氏族の一人であり、特に葬礼において重要な役目を果たしている。天武天皇崩御後、二年以上に及ぶ殯の最後を締めくくる誄を奉じているのである。『紀』は記す。「持統 2 年(688)11 月 5 日、直廣肆当麻真人智徳、皇祖等の^{ひつぎ}騰極の^{ついで}次第を^{しのびごとたてまつ}誄奉る。禮なり。古には^{ひつぎ}日嗣と云す。^{をは}畢りて大内陵に葬りまつる」。ここにみるように、殯の最後に、最重要儀礼である歴代天皇の即位から崩御に至る皇統譜を誄しているのである。重ねて、さらに智徳は、持統天皇・文武天皇の葬礼においても殯の締めくくりの誄を行ったことが『続日本紀』に記されている。「従四位上当麻真人智徳、諸王・諸臣を率いて、^{しのびごとたてまつ}誄奉る」

このように、当麻真人智徳は当麻氏を代表して、天武皇統の天皇葬礼で重要な役割に任じられていたのである。

(5) 大津皇子移葬における当麻氏の役割

ここまで当麻氏の事跡を当麻真人国見、当麻真人智徳を中心にみてきたが、天武皇統の天皇と当麻氏との密接な関係は明らかになった。持統天皇も、天武天皇の重用した当麻真人国見を頼りとし、朝政を行った。この上で、大津皇子の移葬を考えると、次の運びで、事が進められたのではないかと考えている。

「大伯皇女は、大津皇子の刑死後の移葬を、持統天皇に嘆願した。持統は、措置のすべてが終わったいま、移葬を了承し、対応策を、この事に当たる力を持つ当麻真人国見に下問、処置を委ねた。国見は、自己の配下にある二上山の岩屋周辺の石切り場の石工集団を動員、事の性格上、取り急ぎ二上山に新たな埋葬施設を造営、移葬を完了させた」。

このことについて、上田正昭^{註[五]}氏は次のように述べられている。「二上山の葬送には、天武帝の殯宮に名をつらねる当麻氏が加わっていたのではないか」。

6 おわりに

鳥谷口古墳は、大津皇子の墓である可能性が高い。二上山東南部に拠点をもつ当麻氏の当麻真人国見が、持統天皇の依頼を受け、配下の石工集団を動員し、取り急ぎ、鳥谷口古墳を造営、移葬を行ったものと思われる。

大伯皇女の「萬葉集・二上山の歌」は、二上山の^{いただき}頂でなく、二上山麓の鳥谷口古墳を訪れたときの歌であったのだと思う。 — 了 —

[註]

- [一]奈良県文化財調査報告書 第六七集 『鳥谷口古墳』—奈良県北葛城郡當麻町染野所在
終末期古墳— 奈良県立橿原考古学研究所 1994・3
- [二]『国史大辞典』 八 す～た 「石棺」 吉川弘文館
- [三][一]調査報告書 V 遺物 一 七世紀の土器 出土土器の編年
- [四]全集 日本の古寺 『飛鳥・南大和の古寺』 集英社 昭和 59・11
- [五]上田正昭 『道の古代史』 淡交社 昭和 51・7